



島根県公立小中学校  
事務職員研究会

会長：青山悦子  
(松江市立川津小学校)

編集：情報部

VOL.68 2020.3.3 (雛祭号)

発行責任者 蘿 恵 (大田第一中学校)

島事研ホームページ

<http://www.oh-net.com/~kenjiken/>

# 爽

SOU

## 【目次】

- ▶ 「望まれる」とは  
(松江教育事務所長 越野 和胤)
- ▶ 研究部の取組
- ▶ 県大会の感想
- ▶ 研修部の活動
- ▶ 人事交流により気づいたこと・学んだこと
- ▶ 浜田管内夏季研修大会の概要
- ▶ 人権コーナー
- ▶ まんが「しまじいとけんくん」
- ▶ 編集後記



## 「望まれる」とは



松江教育事務所長 越野 和胤

「なんで仕事が終わらないの」「次から次へと仕事がかかる」「ほっと一息つく時間がほしい」「疲れた」  
これらは、近年職員室で聞かれる言葉ではないでしょうか。

私たち教職員の職務内容等に関することは、様々な法律等により定められています。しかし、私たちはすべてが四角四面の中で日々の業務を行っている訳ではありません。多くの人から「そうあってほしいな。」と思われたり、願われたりしていることに対して主に個人で柔軟に対応しているからこそ、各学校において様々な教育活動が円滑に進められている現状があります。

ところで、私は、令和元年11月22日に松江市で開催された「第50回記念島根県公立小中学校事務研究大会」において、NPO法人ファザーリング・ジャパン 代表 川島高之さんの講演を聴く機会を得ました。演題は「『仕事も私生活も、よくばろう!』～子ども教育は世界で一番大切な仕事～」でした。川島さんは、三井物産に入社し、系列上場企業の社長を務めた後、現在フリーランサーとして独立しておられます。仕事だけでなく、子育てや小・中学校のPTA会長等を務める中で得た様々な経験をもとに、「イクボス※1式」経営に関する講演等を企業や各種団体等に対して行っておられます。川島さんは、自身の経験をもとに今の学校の状況を自分なりに捉え、保護者や地域の方が学校とどのような関係であるべきかについて以下のように述べられました。併せてイクボスについて熱く語られました。

学校は、サービス産業でも、福祉施設でもない。教職員がやるべきではない仕事をやっている。  
何でも学校に丸投げはやめよう。「何かをしてもらう」から「何ができるか」に。  
保護者や地域が一体となって教職員のサポートを。

保護者・学校関係者・地域の皆さんが教職員に「望む」ことは、多種多様で多数あります。「望まれる」ことは教職員一人一人の喜びであり、誇りであり、仕事をする原動力となると思います。しかし、そのような「望まれる」ことに対して、一人一人の教職員が、元気でやる気に満ちた気持ちで行動するには限界があります。一人が全力で走り続ける距離には限りがあり、長い距離は無理なのです。したがって「チームで戦う」組織が必要であると考えます。「望まれる」ことに対してチームで考え、チームで対応し、チームで結果を出して、チームで喜びを感じる。そのような組織が、目的を達成できると思います。

私は、働き方改革が進められていく中でイクボス式経営は必要条件となるものではないかと思い、時折川島さんの講演を思い出しています。

※1 3つの定義〔①部下の私生活とキャリアを応援、②自分も私生活を満喫、③組織の成果達成に強い責任感〕を満たしている上司・管理職・経営者

## 激動の令和元年度を振り返って思うこと

### ～ 感謝 と つ な が り ～



今年度は全事研発表がすべてでした。これまで積み重ねてきた研究の成果をまとめ、伝えることはとても大変です。伝えることの難しさ、一方的ではなく相手の事を見ながらでなければ思いも伝わらないことを痛感しました。これからの学校事務職員のあり方はこれまでと大きく変わってくると思われます。今できることを整然と行い、その評価を都度受けながら前進するしかありません。本研究が島事研会員のみならず全国の学校事務職員に対して少しでも還元され、主体性をもって学校運営に参画できるようになることを願います。

(副部長 兒玉 和寛)

ついに迎えた全事研大会での研究発表の年。皆様のご協力のおかげで無事に終わることができました。本当にありがとうございました。十分な働きはできなかったかもしれませんが、研究部員のひとりとしてこの度の発表に関わらせていただき、私も少しは成長できていたら良いなと思います。さて、来年度は新しい節目の年となります。これからも研究って難しいなと構えすぎずに、みなさんにも取り組んでいただけたらと思います。

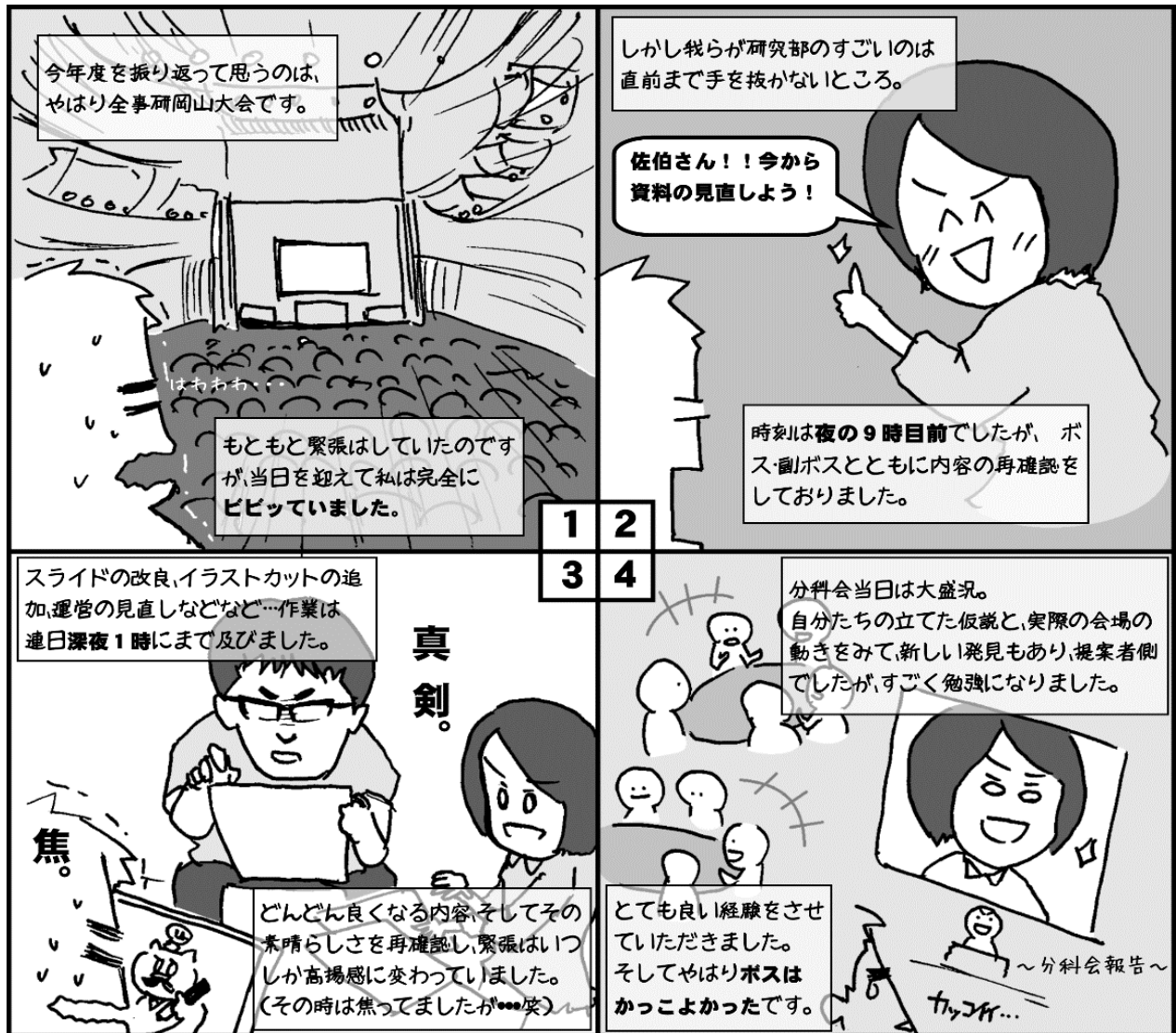
(部員 白瀬 愛美)

全事研大会では、OPムービーの作成等を担当させていただきました。研究活動が続ける中で、「自分らしさ」について考えることが多かったです。自分らしく働いて、楽しく、仕事のしやすい環境を自分で作ることが今の目標です。また、県内の事務職員の方とのつながりが持てたことが自分にとってとても価値のあるものでした。島事研に感謝です。

(部員 奥井 洸介)

今年度は全事研発表を終え、安堵の気持ちが一番大きいです。発表資料のデータ収集・分析をしましたが、自由記述の分析や分類が大変だったとしみじみと振り返っています。アンケートに協力いただいた皆さん、モニター地区として協力いただいた皆さん、助言や叱咤激励をくださった皆さんのご協力のおかげです。大変感謝しております。

(部員 木戸 清治)



(部員 佐伯 圭一)

令和元年度も年度末を迎えようとしています。全事研発表という貴重な機会を与えていただき、忙しいながらも、たくさんの皆さんに助けていただき、なんとか役割を果たすことができました。

「I」ではなく「We」。たくさんの人とつながり、伝え合いながら「私」ひとりではなく「私たち」チームで、子どもの学びの質の向上につながる学校事務を展開していく重要性・必要性は今後さらに増していくと思います。それを実現するために、自分の強みを生かしたコミュニケーションを図りながら実務に結びつけることが必要不可欠です。



モニター地区として協力してくださった皆さん、アンケートをとおして叱咤激励してくださった皆さん、全事研大会や県大会に足を運んでくださった皆さん、温かい声をかけて応援してくださった皆さん、助け支えてくださった役員会の皆さん、そして一緒に活動してきた研究部のみんな。全ての皆さんに感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

(部長 岡田 由美)

# 第50回記念 島根県公立小中学校 事務研究大会

日時：令和元年11月22日（金）

場所：島根県民会館（松江市殿町）

## 参加者の感想

### 全事研岡山大会報告

研究部長や熊丸先生の話聞きながら、自校のミッションは何か考えながら今後の仕事に取り組みたいと思いました。

中間発表を去年聞きましたが、そこからとても進んでいて驚きました。とても興味深かったです。

### 第50回記念事業トークセッション

会員にとっても、とても刺激のある時間だと思いました。トークセッションの発言を爽などの広報誌に掲載してはどうかと思いました。参加していない人にも、今回のパネラーの皆さんの発言を知ってほしいと思います。

→詳しくは記録集をご覧ください。

正直、研究は「大変なもの、難しいもの。」というイメージが強く、いつか携わらなければならぬのかな・・・やりたくないと思っていましたが、「自分のためにやればいい。」という言葉で少しプラスの方へ考えが動きました。

### 講演『「仕事も私生活も、よくばろう！」 ～子ども教育は世界で一番大切な仕事～』

ぜひ、管理職にも聞いてほしい内容だった。学校で動くためには管理職の協力、理解が不可欠。

大変勉強になりました。自分でできることは、していきたいと思いました。自分を大切に、時間を大切にすることで、短い時間で質の向上も図れるのでは、と思いました。職場が変わるには、自分からの復命で管理職に話すのは難しく感じます。働き方改革については、管理職とともに同じ話を聞いて、校内で持ち帰って広げていけるようにできたらいいなと感じました。

WLB(ワークライフバランス)は、重要であると思うが、Wの部分の一部の職員に頼りすぎているように感じられます。その部分をいかに平準化するかもイクボスの力の見せどころであると思いました。

## 研修部の活動について

研修部 部長 横貝 淳子

研修部は、任命権者研修への提案、研修制度の確立、島事研研修活動の充実を「島事研ビジョン2015」の具体的取組内容にあげ活動しています。

今年度は、第50回記念島根県公立小中学校事務研究大会が、11月22日に松江市において開催されました。研究大会は研修部が企画し、準備委員会・役員会と連携して大会運営を行っています。記念大会ということで、50年の歴史を振り返り、島事研のこれまでとこれからをあらためて考える機会をもととトークセッションを企画しました。様々な年代の方々が思いを交わすことで、参加者一人一人が島事研について考える貴重な時間になったのではないかと思います。今後とも研究大会への積極的なご参加をよろしくお願ひします。

また、新規採用者研修、2年目研修等任命権者が行う必修的研修の事後アンケートを実施、要望や意見等を反映させることでさらに充実した研修内容となるように、毎年教育センターに提案を行っています。アンケートにご協力いただいた皆さま、ありがとうございました。

新規採用者の研修プログラム(案)については、昨年度、新規採用者・支援の事務リーダー・地教委へプログラムの内容や活用に関するアンケートを実施しました。いただいた意見・要望等を参考に現在修正案を作成中です。今年度中には会員の皆さまにお示しいたしますので、活用させていただきますようよろしくお願ひします。

研修部は、学校事務職員の研修の充実を図ることで「島根の未来を切り拓く子どもたちの豊かな育ちを支援する」ことができるように活動を進めていきます。



## 『人事交流により気づいたこと・学んだこと』

島根県教育庁益田教育事務所総務課 長本 法恵

人事交流による益田教育事務所における勤務が3年目となりました。

初めての行政機関、久々の他管での勤務で、当初は戸惑いばかり。「すみません。お時間良いですか。教えてください。」が口癖で、「2度目はない。」という気持ちで必死にメモをとっていたことを思い出します。この3年間で、自分の中で意識が大きく変わったと感じることは、次の2点です。

- ① 相手を意識して起案をすること
- ② 組織を意識して仕事をする事



「① 相手を意識して起案をすること」とは、文書を起案する際に「なぜこの書類が必要なのか」という視点をもって起案をすることです。

総務課での仕事のうち、臨時的任用教職員の給与・報酬の支払い、社会保険、源泉徴収事務は、初めて携わる業務でした。これらは予算管理が伴うため「執行伺」の起案時には、予算を確認するとともに支払いに必要な書類を整え、なぜこの書類が必要なのか決裁者に具体的に伝わるようにしています。また、学校からの照会への回答、本庁担当課への照会をする際には、まずは通知、要綱を読み、根拠を基に自分なりに解釈し、相手に伝わりやすく言語化するようにしました。

例えば以前は、次のような照会をすることがありました。

「・・・（事例）・・・といったことがあります。どうしたらいいですか？」

これでは、聞かれた側もどう回答してよいか困られます。ですから、次のように心がけました。

「・・・（事例）・・・という現状があります。私は、・・・（根拠）・・・により、・・・（解釈）・・・と考えます。以上のことから、・・・（伺い）・・・と認定としてよいでしょうか。」

つまり、起こっていることを客観的に整理して伝えたのちに、法令や要綱等などの根拠等を基にした自分なりの解釈を加えつつ、相手に伺いを立てるようになるということです。これからも、自分の担当業務に責任を持ち、相手を意識した起案をしていきたいと考えています。

「② 組織を意識して仕事をする事」とは、自分の解釈が正しいか等迷った際、まわりに聞くことを躊躇しないということです。

複数の事務担当者がある職場で勤務している県職員であれば当たり前のように思われるかもしれませんが、今まで同業者がいない環境が多かった私にとっては、自分流の曖昧な確認や解釈による処理をしていたこともあったように思います。しかし、ここ総務課では事務担当者がひとりではないため、すぐに協議できる環境がとても心強く感じています

（ただ、事務所のような行政機関でなくとも事務グループ等でも、自分の解釈について尋ねたり、相談したりすることはできるように思います）。これからも、組織を意識して仕事をする事で、事務担当者としての力量を高めていきたいと思っています。

このように、人事交流や他管（若しくは他の市町村）の学校での勤務など違う環境に身を置くということは、自分に足りない部分を知るよい機会になると実感しています。また、学校に戻ったら学校事務職員として今まで以上に職務に専念したいと考えようになりました。貴重な経験をさせていただいていることに感謝しながら、これからはがんばっていききたいと思います。

# 第21回 浜田管内事務職員研修大会

## 2019. 8. 21 (水) 江津市地場産業振興センター 大会概要

浜田管内事務職員研究会は、浜田市、大田市、江津市、邑智郡（川本町、美郷町、邑南町）で構成されています。毎年度、夏季に行う研修大会は4つの市郡でローテーションを組み、主管となった市郡が計画から運営までを担当します。今年度は江津市主管で開催されました。ワークショップでは活発な意見交換が行われ、充実した研修となりました。大会の概要を紹介します。

（内容は浜田管内事務職員研究会 会報「活動記録」から一部抜粋したものです。）

**大会テーマ**  
「これからの学校づくりをみんなで考える」

### 講義

#### 1

大切にしたい“三つの目”

- ① 鳥の目・・・目的、目標、全体像
- ② 虫の目・・・方策、具体策
- ③ 魚の目・・・背景を知る



虫の目で見ることが事務をつかさどることになる。

1から10を、10から100を創り出す「キャッチアップの時代」から、0から1を創り出す「イノベーションの時代」へ変わった。半歩先の未来を生きていく子供たちを育てるためICT機器を活用した授業が必要。“チーム学校”としてサポートしていくことが重要となり、事務職員の力も必要となる。



講師 江津市立高角小学校  
校長 石橋邦彦先生

### ワークショップ

#### 「各学校の課題を考えるを通して、学校事務職員の役割を確認しあう」

事務職員、管理職、教育委員会職員、教育事務所職員等が、市郡・校種・学校規模・職種を取り混ぜた6～8人の14グループに分かれ、「これからの学校づくりをみんなで考える」のテーマで「学校の課題」を書き出した。

- ① うちの学校の問題(課題)
- ② 事務職員が関われる問題(課題)
- ③ 最初に取り組む問題(課題)

に分類しピラミッドチャートを作成した。

事務職員が関われる問題(課題)についてチーム学校として各グループで考えた対応策をホワイトボードに貼り出し、全体で「財務領域」「情報共有」「業務改善」「研修」「連携」等に分類した。



## 事例発表

1

### 「郷田小学校での取組」

事務職員1年目に参加した前回大会で刺激を受け、「職場環境の整備」「集金方法の変更」に取り組んだ。

2年目の今年度は、6月に全職員で参加した働き方改革の研修会をきっかけに業務改善職員会議を企画・運営し、2学期からの取組について決定した。

主事というキャリアステージだからこそ、今の自分にもできる学校運営への参画は何なのかを考えながら、業務にあたっていきたいと思っている。

浜管事務研修大会(2018年)

学校運営への参画を、「知る」「考える」「目指す」大会後 **何かやってみよう!**  
「今の自分にできることをする」

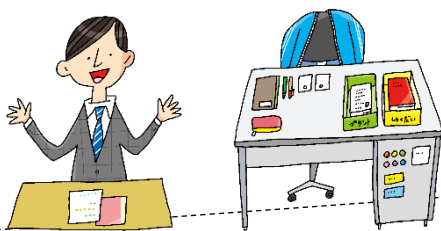
2年目をむかえて

「**今の自分**」にできることをする」  
1年目 **個人**でできること  
2年目 **全体**で協議の場を企画

### 「青陵中学校での取組」

着任1年目の今年、目指す学校像である「誰もが誇れる学校」のために事務職員としてどのようなことができるか考え、定型業務の改善と執務環境の改善の取組を行った。

何のために改善を行うのか、学校運営への参画の意味づけが大切だと思う。



## ワークショップ

2

「各事務グループに分かれ、グループや市町の課題を考えることを通して、児童生徒を中心に据えた主体的な学校事務を考える」

各事務グループに江津市の管理職の先生と事務職員がファシリテーターとして加わり、他職種の参加者を交えて“学校内”“グループ内”における課題を見つけ、マンダラの表を活用し解決策を考えた。その解決策について5W1Hの表を使って具体的な行動を検討した。

ポスターセッションにより、他グループの様子を聞いたり自分のグループへのアドバイスをもらったりした。

## 講義

2

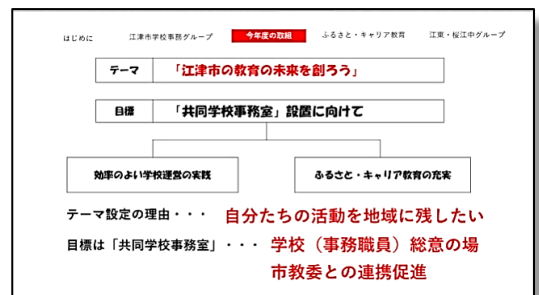
講義Iに続き、石橋校長先生による講義。学校は単独で存在できるものではなく、子ども・家庭（保護者）・地域住民・教職員の四方が信頼・連携・協働により「四方よし」となって学校の存在意義となる。【つなぐ】【つくる】【つづける】の三つの「つ」を大切に実践していく。

## 事例発表

2

### 「江東・桜江中グループの取組」

江津市内の学校が、東部・中部・西部の3グループに分かれ「効率の良い学校運営の実践」の活動を充実させ、「ふるさと・キャリア教育の充実」への余力を生み出し、教育力の向上につなげている実践を紹介。



# 人権コーナー

## 『人権と幸せ』

雲南市立海潮中学校  
友塚 暁

人権とは、「人々が生存と自由を確保し、それぞれの幸福を追求する権利」と定義されているそうです。なんと幸福という言葉がでてきました。全事研大会、県大会でも耳にした、ウェルビーイングとも言われる言葉です。全事研大会では、児童生徒のウェルビーイングの向上を目指してほしいというような指導助言がありました。しかし、一人一人それぞれの形を持っている幸福のために学校教育でどのようなことができるでしょうか？そもそも幸福、“幸せ”って何でしょう？皆さんは考えたことがありますか？

幸せとは人権の定義にもあるようにそれぞれ幸せを実感する瞬間、出来事、境遇は様々であり、普遍的な幸せを定義することは不可能だろうと考えます。しかし、幸せとは人それぞれが自分に対して抱く感情であり、その人が自分自身のことを他者と比較することなく、自分の心に嘘偽りなく、「自分は幸せだ！」そう思うことができれば、それが幸せだということです。つまり、学校教育によって子ども一人一人を幸せにすることは極めて困難であるが、子ども一人一人が幸せを実感できるようなマインドセットを形成することはできる、そう考えることはできないでしょうか？

そのマインドセットを形成するために2つのキーワード「主体的であること」「自己肯定感」。自分の人生、人に流されず自分の意思で選択・行動していくこと、その意思決定のために必要なのが自己肯定感。近年、懸念されている自己肯定感の低下、その向上が児童生徒のウェルビーイング向上への入り口だと私は思っています。まずは我が身から。



## しまじい と けんくん vol.3



原作・画：佐伯 圭一



【編集後記】 アstroロジーをご存じですか？占星術（占星学）ともいい、生年月日などから得られる天体の配列や意味を読み取ることで、その人の性格・思考などがわかるそうです。実際に受けてみて「そうだ」と思うことも、「意外だ」と思うこともあり、自分では気づかなかった自分を知ることができました。また自分を見つめ直すきっかけになりました。忙しい時ほど自分を見失いがちですが、自分自身を見つめる時間を大切にしたいと思うこの頃です。I・Y

